

関ヶ原の合戦その後

原田 史子

吉川広家は慶長五年(一六〇〇)の関ヶ原の合戦において、毛利軍を動かさなかったことが西軍の大敗の一因と批判を受けてきました。

広家本人は毛利家の存続のために毛利家の重臣・福原広俊と相談し徳川側と密約を交わしたのであるとされています。広家は、慶長六年(一六〇一)に、輝元宛に自身の想いを記した手紙を送ったようです。

当館には輝元宛の記したであろう下書きが残されているものの、肝心の毛利家には、広家のその想いを残った手紙が残っていません。

ところで、広家の関ヶ原の合戦での不戦については、輝元の意に反したものでなかったと推測しています。もし、意に反していたら、何らかの処分を下したはずですよ。

合戦から三年後、毛利輝元は広家に対して、息子藤七郎のことをたよりにしている内容の手紙を送っています。



毛利輝元書状(吉川家文書197号)

(現代語訳)

「手紙と樽二つ、ならびに珍しい「このこ野大根」に対して、御心遣い有難うございます。別して賞玩しています。お酒はひとしおのことです。ともかく傍に置き、一日中給わり秘蔵として大切にします。

一、私の方は、変化がありません。本日十二日、家康へ將軍の宣下があり、勅使が御座になりました。家康は近いうちに参内することです。

一、江戸へ普請の人員は早々に派遣されることとあります。殊に派遣されることは尤のこととあります。

誠に家禄とは申しながら遠国のこと、人一倍心遣いが大事と存じます。昨年のようにあればどうかと申す事です。

一、藤七郎事、懇意にしてください。一段と息災のことです。年が明けまして、我等も結果を承ります。

一、筋が昨年の冬から痛いとのこととでぬかりなきようにしてください。この春より治療が大事です油断は禁物です。折々、御上洛することが大事です。徳法達し申すことです。

福原広俊にも申します。私は気分があまりすぐれません。はや六十にあたります。次第に体が草臥れて、今年は特にそう感じます。なかなか話

すことも難しいと思いますが、藤七郎のためにふんばらないといけません。万期面拜時です。

一、私は暇な時に申し上げて下さるべきと思いますが、

家康様は今には御下の由です。こちらが御座として居る間は、江戸へ御下向の節に立ち寄ってください。

一、池田輝政の二男(忠継)が備前へ遣わされ、美作に森忠正が遣わされます。池田輝政とは懇意なのでこの決定を嬉しく思います。謹んで申し上げます。

二月十二日 輝元(花押)  
広家

追伸、あなたの息子は健康なので成人になると思います。一段と利発に見受けました。竹庵物語を話します。喜ばしいことです。藤七郎が申しています。」とあります。

この手紙から輝元は広家を頼りにしていたことがわかります。

こののち、輝元の娘は広家の息子の正室となり、あまり知られていませんが、広家の孫娘が毛利秀就(輝元の息子藤七郎)の養女となっています。これは、吉川氏が毛利家を支える家であることを次世代に引き継がれていった証といえます。